

「変化師

（偽り続ける者）」

窪
木

海

【あらすじ】

ある日、大学2年生の緑川誠二郎（20）は、亡くなった兄・誠一との対話を求めて、速水幻庵（36）の元を訪れる。速水は、徹底した『役作り』によってその対象者を完全に再現させ、会えなくなった人への再会を可能にさせる『変化師』なのだ。依頼は無事成功し、誠二郎は、速水が変化した誠一に自身の悩みを打ち明ける。またこの過程を通して誠二郎は、速水の底知れなさに惹かれ、変化師の持つ「自分以外の誰かになれる」という可能性に憧れ始めるのだった。

親からの重圧、そして自分の意思を親に上手く伝えることすらできないもどかしさに苦しむ誠二郎は、自分を変えるため、速水に弟子入りすることに。速水の変化師としての仕事ぶり・生き様を側で見続け、必死に勉強しようとする誠二郎。その姿を見て、当初は否定的であった速水も次第に信頼を置き始める。

しかし、誠二郎はある時、親からの激しい

叱咤を受け、速水の元を訪れられなくなってしまう。そんな中、速水の元に依頼者としてやってきたのは速水の生き別れの妹・早川愛花（２２）であった。愛花は、どうか病床の父に「消息不明の兄（速水）」と話をさせてあげたい、と懇願するが、速水は自身の過去から目を背け、その依頼を拒否する。

久しぶりに訪れた誠二郎は、速水の家族の事情を知ると、自身の思いを打ち明け、依頼を受けるように説得する。それでも拒み続ける速水に対し「俺が親に自分の意志を告げることに成功したら速水さんも自分自身に向き合ってほしい」と交換条件を出す。奮闘する誠二郎の姿に心動かされた速水は、誠二郎に変化の指導をし始め、また自身も、己の過去に向き合うことを決めるのだった。

そしてついに、誠二郎は自身の思いを両親に打ち明けることに、速水は父親と和解することによってそれぞれ成功し、本来の自分自身というものを再確認するのだった

【人物関係表】

緑川 誠二郎 (20) 大学2年生

速水 幻庵 (36) 変化師

緑川 晴子 (56) 誠二郎の母

緑川 正宣 (61) 誠二郎の父

早川 愛花 (22) 速水幻庵の妹

早川 耕治 (68) 速水幻庵の父

吉岡 晴良 (19) 誠二郎の同級生

春野 叶美 (20) 誠二郎の同級生

正宣の部下

野球選手

女子高生

演劇サークル員

○都内・街中

大通り。どこを見渡しても人、人、人。

○同・路地裏

薄暗く、人も歩いていない。ゴミ袋なども捨てられている。

近くの古びたビルの壁には『3階 変化師―速水幻庵事務所―』の看板。

○速水幻庵事務所・応接室

部屋の中も薄暗い。部屋の棚には沢山の書籍、その周りにはレコードのコレクション。

中央に置かれた小テーブル。その周りのみ照らされている。

速水「ささ、どうぞ、冷めないうちにね」

速水幻庵（36）、コーヒーを小テーブルに置き、腰掛ける。ロン毛に無精髭、目には黒い丸サングラスをかけている。

ニヤツと不敵に笑う速水。

テーブルを挟み、その前に座っている
緑川誠二郎（20）。どこか警戒してい
る様子で拳をギュッと握っている。

速水「あれ、好きでない？」

誠二郎「……本当に可能なんですか。その、
変化（へんげ）……ってやつ」

速水「貴方も疑り深い人だ」

誠二郎「そりゃそうでしょ、そんな……オカ
ルトみたいな。こっちは……本気なんです」

速水「ご安心ください、手数料の方は後払い
で結構。もし結果にご満足頂けなかった場
合は一切支払わなくても大丈夫ですから」

誠二郎「えっ。……ほんとですか？」

速水「まあもつとも、これまで私の変化に満
足していただけなかったお客様は一人とし
ていませんがね」

ニヤリと笑みを浮かべる速水。

速水、突然ポケットから棒キャンディ
ーを取り出し、舐め始める。

速水「それでは本題に入りましょうかね。早速例のものをいただけますか？」

誠二郎「え……あ、はい」

誠二郎、足元に置かれた紙袋から何枚かの資料を取り出し机の上に置く。その中には一人の男性の様々な時期、場面を写した写真が複数枚。

速水「これが今回の対象者、緑川誠一さん……つまり誠二郎さん、貴方の兄にあたる方ですね」

誠二郎「はい」

速水「誠一さんは1992年5月9日生まれ。ご存命であれば32歳になられていた、と」

誠二郎「……はい」

速水「ではこちらは私の方で頂戴いたしましたよう」

速水、誠一の写真を机の引き出しにしまう。

誠二郎「あの」

速水「ん、なんでしょう？」

誠二郎「必要あったんでしょかね……赤ん坊の時の写真とかまで。今回私が会いたいのは亡くなった当時の、20歳ぐらいの時の兄で……」

速水「当然でしょう！ そりゃ貴方ね、人間、目に見えている今が全てではない。これまで歩んできた過去があるからこそ世界にただ一人だけのその人となるのです。だってほら、貴方自身だってそうでしょう？ 違います？」

誠二郎「あ……。(反射的に視線を逸らし)まあ……ええ、はい」

速水「(大袈裟に咳払いし)ゴホン！ それでは幾つかの質問に答えていただきましょうか」

誠二郎「あつ、はい！」

速水「いやいや、そう固くならず。えー、まずはそうですね……緑川誠一さんはどんな音楽を好まれていましたか？ どんな文学に親しみ、どんな映画を楽しんでおられ

ました？ ゲームなんてのは？」

誠二郎「えっ」

×

×

×

速水、3枚の白紙を誠二郎に差し出す。

速水「では続いて誠一さんがご存命だった頃の主な1日のスケジュール……ですね。これを書いていただきたい。平日、休日、バイトや部活動があった日、なかった日なども書き分けていただけると非常にありがたい！ もちろんわかる範囲で結構」

誠二郎「わかりました。記憶を辿りながら……書いてみます」

誠二郎、紙にスラスラと書き込んでいく。ペンの進みが早い。

速水、笑みを浮かべて、見守っている。

○同・玄関

ドア付近に速水、誠二郎。

速水「それでは……2、3ヶ月ほどでしょうかね。今回の質問や貴方に頂いた資料を元

に『役作り』いたしますので。また連絡の方、させていただきましよう」

誠二郎「……わかりました。よろしくお願いいたします！」

深々と頭を下げる誠二郎。

速水「では、久方ぶりの再会の時をどうぞお楽しみに」

ニヤリと笑う速水。

○誠二郎の家・外観（夜）

辺りは薄暗い。二階建ての一軒家。「緑川」という表札。

○同・誠二郎の部屋（夜）

壁には『ノルマ GPA 3.5以上』と書かれた貼り紙。

誠二郎、机に座り、就活ガイドブックに目を通している。

本の中には幾つかの付箋が貼られている。

誠二郎、本を閉じ、大きな溜息。本の表紙には『目を通しておくように。特に付箋が貼られた会社をチェックすれば。 晴子』と書かれた紙。

誠二郎「（ボソッと）……またかよ」

誠二郎、机に置かれた写真に目をやる。
兄・誠一と幼少期の誠二郎が笑顔で写っている。

○誠二郎のスマホの画面（数ヶ月後）

メッセージの通知。メッセージの主は速水。

○同・店内

席に座っている誠二郎。誠二郎、店の中を何度もキョロキョロと見回している。

誠二郎、気分を紛らわすようにアイスカフェラテを飲む。

次第に足音が近づいてくる。

誠二郎「！」

速水の声「（普段と少し違う声色で）おっ、誠二郎。お前そんなの飲めるようになったのか。前はあんなに苦そうにしてたのにな」

誠二郎の手が止まる。誠二郎、ハッと顔を上げる。

顔を上げると速水が立っている。数ヶ月前とは別人のような姿。髪は整えられた短髪。肉体も引き締まり、お洒落な服装。お洒落な帽子。

誠二郎「えっ」

速水「（写真の誠一のようになくしゃつとした笑みで）よう、久しぶり」

誠二郎「兄……ちゃん」

速水、誠二郎の向かい側に座る。

固まってしまっている誠二郎。

速水「おい、どしたよ？」

誠二郎「ほんとに……ほんとに速水さん……ですよね？」

速水、くしゃつと笑い

速水「なーに言っただ、色々喋りたかった
んだろ？ 俺と」

誠二郎「あ……うん」

×

×

×

速水の元にもコーヒーが届いている。

速水「で、どうよ？ 大学生活は」

誠二郎「まあ、楽しい……かな。うん、それ
なりに」

速水「そりや大学なんてまさに青春真っ只中
だからな。俺だって随分と好き勝手にエ
ンジョイしたもんだ」

誠二郎「（驚き）えっ、そうなの」

速水「ん、まあな」

誠二郎「……そっか。で……俺に聞いてこな
いの、例のこと」

速水「ん、なによ？」

誠二郎「ほら、この時期だし……就活とか」

速水、コーヒーを一気に飲み、一息。

速水「せっかく久々に会ったってのにそんな
堅苦しいこと聞きやしねえよ。別に就活が

全てじゃねーし」

誠二郎「そう……だよね」

速水「つかそれぞれ向き不向きってのも違うしな。ほら、お前だって色々あんだろ？
今だからやりたいこと、とか将来的にやってみたいこと、とかさ」

誠二郎「……」

誠二郎、俯く。

速水「まあ、でもなんだ？　もし何か悩んでることでもなんでもあるなら今この場で言ってみな。頼ってほしいんじゃないかよ。お兄ちゃんを」

くしやつと笑う速水。

誠二郎「……！」

○速水幻庵事務所・外観（夕方）

○同・応接室（夕方）

再び小テーブルを囲み座っている速水と誠二郎。

速水、黒い丸サングラスをつけており、
ミステリアスな表情。変化時とはまるで別人のような雰囲気。

誠二郎「本当に……本当にありがとうございます
ました！」

速水「いえいえ、そういう仕事ですので」

誠二郎「本当に夢のような時間でした。もう
何とお礼を言っているのか。この御恩は絶
対に忘れませんから！」

速水「いやいや、とっとと忘れちゃってくだ
さい。満足いただけたのであれば先ほどお
伝えした口座の方に代金をお支払いくださ
ると幸いです。貴方のその言葉と報酬さえ
いただければ私はもう十分ゆえ」

ニヤツと笑みを浮かべる速水。

誠二郎「それは勿論です。……あの、一つ良
いですか？」

速水「はい、何か？」

誠二郎「あれはどうやってるんです、その……
変化。俺はてっきりメイクとか軽い整形

なんかを駆使して見た目をそっくりにさせるものだと思っていました」

速水「いちいち整形してちゃ元が取れないでしょう。それにせつかくの甘いマスクを失いたくはない」

誠二郎「……はい。だから貴方は見た目を完全に兄そのものにしたわけではなかった。それなのに……俺の目の前に居た貴方は兄そのものだった。あれは何なんですか」

速水「うーん。申し訳ないがそれは企業秘密ということだ」

誠二郎「そう……ですよね。あ、あともう一つだけ」

速水「はい」

誠二郎「俺の前に現れた兄は俺より一回りくらい上の見た目でした」

速水「それはそうでしょう。お兄様がまだご存命であれば32歳。貴方のちょうど一回り上なんですから」

誠二郎「でも、俺が貴方に渡したのは20歳

の頃の兄の写真とデータ。それが何故……」

速水「なあに、容易いことなのですよ。この

変化師・速水幻庵の手にかかればね」

ニヤリと笑う速水。サングラスの奥の

瞳が光る。

誠二郎「……！」

誠二郎、速水から視線を逸らせない。

○同・玄関（夕方）

誠二郎、玄関のドアを開け、外に出る
ところ。

見送りに来ている速水。

誠二郎「それじゃあ本当にありがとうございます
ました。あの、また……あの……」

速水「なんです？」

誠二郎「あつ、また遊びに来ても良いかなっ
て……すみません」

速水「どうして謝るんです？」

誠二郎、俯いて

誠二郎「いや、迷惑……かなって」

速水「私は別に構いませんよ。悲しいことに私は友人が少ないのでね。まあ……その時の私はもう貴方の兄ではありませんけれどもねえ」

○誠二郎の家・外観（夜）

辺りはすっかり暗くなってきている。

晴子の声「失望しました」

○同・居間（夜）

俯き、座っている誠二郎。

その向かいには母・緑川晴子（56）と

父・正宣（61）が座っている。

眉間に皺を寄せ、誠二郎を睨みつける

晴子。正宣、その隣で腕を組み陰しい

表情。

晴子「あなたには心底失望しました。大学生になるとこれだからまったく……」

誠二郎「いや、それはさ……」

晴子、手のひらを向け誠二郎を静止させる。

晴子「門限は何時か……わかっていますよね？」

誠二郎「はい……（小声で）20時」

晴子「では問題です。今はいったい何時でしょう？」

壁にかけられた時計の針は20時35分を示している。

誠二郎「（ボソツと）……35」

晴子「聞こえない！」

正宣「……ほら、ちゃんと言いなさい、誠二郎」

晴子「……本当にこんなことでどうするんですか？ 春学期のGPAは3.2。目標には届いてませんでしたよね。はい、ここまでOK？」

誠二郎「……はい」

晴子「あなたはね、もっと勉強しなきゃいけないの！ 明らかに勉強量も将来への計画性も足りてないの！ あなたはね、他の誰よりも頑張らなくちゃならないの」

誠二郎「（ボソツと）いや……でも……」

部屋の隅には誠一の遺影が置かれてい
る。

晴子「あなたはね、あの子の分も頑張らなく
ちやならないんだからね。わかってるでし
よ？」

正宣、立ち上がり

正宣「まあ晴子、取り敢えずその辺で、な。

ほら、誠二郎は真面目な子なんだからさ、
俺たちのことを裏切るような真似をするは
ずがないだろ？ 誠二郎なら必ずさ、ちや
んと俺たちが望んだ会社に就職してくれる
って」

正宣、誠二郎の肩に手を置き

正宣「な？ 俺も晴子もちやんと期待してる
からさ」

正宣、部屋を出ていく。

晴子、わざとらしく大きな溜息をつく。

晴子「私は何もね、あなたに意地悪がしたい
わけじゃないの。ね、それはわかるでしょ

う？ 私はね、あなたが自分で余計なことを考えなくていいようにこうやって色々決めてあげてるの。それなのにあなたは……」

誠二郎「うん。……そうだね。ごめんなさい」

無理やり笑みを作る誠二郎。

○速水幻庵事務所のあるビル・前（日替わり）

口笛を吹きながらビルから出てくる速水。

速水「！」

ビルの前に誠二郎が立っている。

速水「おや」

誠二郎「俺を……弟子にしてください」

真剣な眼差しで見つめる誠二郎。

○速水幻庵事務所・速水の自室

本棚には心理学に関する本や様々な職業の専門書など変化のための資料が数多く収納されている。

部屋には速水と誠二郎。

速水「私は弟子を取るつもりなんてのはありませんし、現状この仕事は一人でも充分成り立っています。いやむしろ私一人にしかできない……。申し訳ないが貴方の望みを叶えることはできないでしょう」

誠二郎「そこをなんとか！　お願いします！」

速水「それに貴方、今大学生なんでしょう？　こんな私なんかと呑気に遊んでいる暇はないはずだろうに」

誠二郎「……いや、今だからこそ……今だからこそ貴方の元で働いてみたい、って思っただけです！　俺も変化をしてみたいって」

速水、スンッと立ち止まり

速水「……妙ですねえ。私はね、貴方はこう自分から能動的に、しかもここまで積極的に行動するタイプだとは思っていませんでしたから」

誠二郎「……！」

速水「……まあわかりました。そうであればバイトとして働いてもらいましょうか。掃

除や家事、お客様へのお茶出し。そんなもので良ければ、ね」

誠二郎「（心からの笑みで）ありがとうございます！
ます！」

○同・別室

生活空間のようになっている部屋。勉強机、ベッド、本棚には漫画本、幾つもの収納されているお洒落な帽子。

部屋の入り口に立っている速水と誠二郎。

誠二郎、ぼんやりと部屋中を見回す。

誠二郎「この部屋……」

速水「懐かしいでしょう。あなたのお兄が生前使われていたお部屋を再現させていただきました。役作りのためにね」

誠二郎「一回の依頼のために……ここまで」

速水「当たり前ですよ。私はこの仕事に誇りを持っていきますから。役作りとは何もただ見た目を寄せれば良いものではありません。

心の内から……内面から作り上げていく必要がある」

誠二郎「……凄い」

誠二郎「いつの間にかメモ帳とペンを手にしており、速水の話した内容をメモしている。

速水「ん、なんですか？ それ」

誠二郎「あつ、勝手にすみません。色々……勉強させてもらおうと思って。嫌……ですかね？」

速水「まあ別に構いませんよ、ご勝手に。(咳払い) それではこの部屋の後片付けの方をお願いしますね。早速次のご依頼が来ていますので。(ボソッと)これは貴方が自身と向き合う良いきっかけにもなるでしょうし」

誠二郎「あの……」

速水「？」

誠二郎「俺もなれるでしょうか、自分以外の誰かに。いや……なりたいんですよ」

速水「……さあ、どうでしょう。演じるとい

うことは決して甘いものではないですから
ねえ。それでは」

速水、部屋を去っていく。

誠二郎「……」

誠二郎、ベッドに倒れ込む。

そのまま大の字になり天井を見上げる。

誠二郎「こんな……景色だったのかな」

○同・速水の自室（夕方）

机には数々の資料が置かれている。若い男の写真。1日のスケジュールを書き記したものなども。

速水と誠二郎、机を囲んで座り、資料に目を通している。

速水「この男性が『石田瑛斗』さん。今回の対象者です。依頼者にとっては恋人にあたる人物であり……生きていれば今年で27歳」

誠二郎「なれるんですか？ 一回りくらい下ですよね」

速水「問題ありません。青臭さの残る高校生から少々枯れ始めた老紳士まで見事に变化して見せますよ。まあ流石に幼子や女性になるのは無理がありますが」

速水、手帳を取り出し、写真を見ながら次々とメモ。

速水「(ボソボソと)非常に姿勢が良い。週4日はジムに通っていたようなのでその影響か。笑う時に右眉をやや上げる癖あり。またこの食事時の写真の箸の持ち方、そしてこちらの座っている際の足の閉じ具合。これらからは根っこの部分の育ちの良さというものが伺える。そうなるかと……」

誠二郎、速水の仕事ぶりに圧巻されている様子。

誠二郎「結構……多いんですね、依頼してくる人って」

速水、メモを続けながら

速水「もう一度あの人に会いたい、あの人が話したい。……人間なら誰しも、一度は

考えたことがあるであろう普遍的な願いです。需要は多いのですよ」

誠二郎「……本当のその人ではない、とわかっていても」

速水「もちろんそれは心得ています。それでも、たとえ仮初のものであったとしても、その一瞬を求めて皆訪れるのですよ。そして私も……もちろんやるからにはこの体全てにその人を憑依させ、その人の感情を完璧にこの身に宿し……お客様に向き合っているつもりです」

誠二郎「幻庵さんは居ないんですか？　そういう、また会いたい人、みたいな」

速水の手が止まる。

速水「……居ませんね。私はそんな感情持ち合わせちゃいないんです、プロのエンターテイナーですから」

○スポーツジム・トレーニングスペース（日替わり）

ランニングマシンで走っている速水。
髪型はセンター分けになっており、髭
も全て剃られている。
黙々と走り続ける速水。

○速水幻庵事務所・速水の自室（日替わり）

TV画面ではプロ野球中継が流れている。
見入っている速水。速水の上腕は以前
よりやや太くなっている。誠二郎、お
茶を運び、部屋に入ってくる

実況の声「おーっと、これは、これはホーム
ランだ！」

速水「（立ち上がった）よっしゃ！」

速水の側にそっとお茶を置く誠二郎。

誠二郎「幻庵さんって普通に野球とか見るん
ですね。なんか意外」

床に落ちている資料。石田瑛斗に関す
る資料の一部のようだ。『石田瑛斗 趣
味：野球観戦、筋トレ』と書かれている。

○同・応接室（日替わり）

部屋に入ってくる誠二郎。

誠二郎「お疲れ様です」

椅子に座っている速水、スマホの画面を真剣に見つめている。スマホからは女性の声。

誠二郎「近づいて」え、何見てるんですか？」

スマホの画面には、女子高生数人が教室で楽しそうに話している動画が流れている。

ニヤける速水。

誠二郎「えっ……」

速水「誤解しないでいただきたい」

誠二郎「いや、まだ何も言ってませんけど、別に」

速水「これはね、今回の依頼人の高校時代の動画です。ご本人が提供してくださりました」

誠二郎「……それ今回の依頼には何も関係ないでしょ。職権乱用ってやつなんじゃ」

速水「……まったく察しが悪い。今回の対象者・石田瑛斗氏は高校時代に依頼人と出会い、恋に落ちました。この頃の依頼人を見て、ですよ。だから私が完璧に対象者に成り切るためには同じように彼女に『恋』しなければならいんです。嘘ではなく、心から、本物の恋というやつを」

誠二郎「……」

速水「貴方、今引きましたね？」

誠二郎「いや別に……」

速水「どうです？ 変化師というのは貴方が思い描いていたような仕事とは違いましたか？ もし嫌気がさしたのであればもう通うのをやめたとしても別に構いませんよ」

誠二郎「いや……通わせてください！ 通いたいです！ 速水さんの仕事……これから先も見ていて構いませんか？」

立ち上がる速水。誠二郎に背を向ける。

速水「……好きにどうぞ」

誠二郎、自然と頬が緩む。

○誠二郎の通う大学・廊下（日替わり）

多くの学生が歩いている。誠二郎、通知音に気がつきスマホを開く。

速水からのメッセージ。

『今回の依頼も無事完了しましたよ』

○都内・街中（夕方）

夕暮れ。人混みの中を掻き分け、走る

誠二郎。路地裏に入る。

その付近で部下と歩いているスーツ姿の正宣、誠二郎の後ろ姿に気がつく。

正宣「……」

○速水幻庵事務所・応接室（夕方）

応接室に入ってくる誠二郎。部屋は暗く、幻庵の姿はない。

誠二郎「幻庵さーん。幻庵さーん。……あれ」

何処からか呻き声のような声。

誠二郎「……」

○同・洗面所（夕方）

ソツと洗面所を覗き込む誠二郎。速水、誠二郎には気づかず、顔を洗っている。

速水「……………」

速水の息遣いが荒い。何度も何度も顔を洗う速水。

目の前の鏡を見る速水。鏡に映る顔が石田瑛斗の顔に変わる（速水の幻覚）。

速水「違う……違う……」

速水、自身の頬を何度も叩く。深呼吸する速水。

速水「……………」

振り返る速水。誠二郎と目が合う。

誠二郎「あっ……………」

速水、ニヤツと笑う。

○同・速水の自室（夕方）

速水、床に座り込む。誠二郎、その場に気まずそうに立っている。

速水「何してるんです？ さあ、座って」

誠二郎「あ……はい」

誠二郎、速水とやや距離を置き座る。

速水、誠二郎の元にサッと近寄り、至

近距離で目を合わせる。

速水「……誠二郎くん！」

誠二郎「（目を泳がせ）あっ……え、いや、俺は別に何も……」

速水「（遮って）メソッド演技！ それからスタニスラフスキー・システム」

誠二郎「えっ……」

速水「聞いたことありますか？ どちらも有名な演技理論です。私も昔、演技を勉強していたことがありますね。そして私は……これらの演技法を活用することにより変化という妙技を成立させているのですよ」

誠二郎「……」

速水、立ち上がり、部屋の奥の棚に掛かっていたカーテンを剥がす。そこには数え切れないほどの名作映画のDVDが

詰まっている。

速水「貴方、これまでの人生で一番感銘を受けた映画は何ですか？ 最も心躍らされた舞台は？ どうです？」

誠二郎「すみません、その辺はサッパリで……」

速水、大きくため息をつき

速水「まあ、Z世代にとって最大の娯楽は30秒で気楽に楽しめるショート動画なわけですか。タイパ重視、ってやつですねえ」

誠二郎「……」

速水「それはさておき……貴方、よく考えてみてください。どうして我々は映画や舞台に金を払うのでしょうか？ あの中で行われているものなんて全て虚構、嘘っぱちです。主人公の涙もヒロインとの熱い恋愛も……そしてキャラクターの死も。全部嘘だ。真実なんてそこには一つもない」

誠二郎「……」

速水「それでも……それを知ったうえで私た

ちはその嘘に心を動かされ、その嘘を求め続けるのです。不思議でしょう？ でもそれはね、まさに役者の肉体……そして己の精神をも削った演技によつて、そのキャラクターの感情が本物に極めて近い何かになつてゐるからなんです。私の『変化師』という仕事だつて同じようなもの……いやそれは少し自惚れでしょうか」

頭をポリポリと搔き、笑う速水。

誠二郎「……どうして」

速水「はて？」

誠二郎「どうして自分からそんなこと……いきなり。俺がいくら聞いたつて……はぐらかしてばかりだったのに」

速水「うーん……まあ、今の貴方にとってこの話をするのが最善の結果に繋がると、私が本能的に判断したからでしょうかねえ」

誠二郎「それつてどういう……」

応接室の方から固定電話の着信音。

速水「おっと失礼、早速、次の依頼のようだ」

速水、部屋を出ようとする。

誠二郎、立ち上がり

誠二郎「ちよっと待ってください！」

速水「（無視して）いや、繁盛繁盛、商売繁盛」

速水、部屋を出ていく。立ち尽くす誠二郎。

誠二郎、映画のDVDが収納された棚が気になり、近寄っていく。

誠二郎「なんで演技の勉強なんて……」

ぼんやりと棚を眺める誠二郎。その中の一本、『遠い空の向こうに』のDVDの隣に一枚の紙が挟まっていることに気がつく。

誠二郎、その紙を取り出す。

誠二郎「……！」

一枚の家族写真。中年男性、20歳前後の青年（16年前の速水）、5、6歳くらいの少女が写っている。

○誠二郎の通う大学・小ホール（日替わり）

奥にはステージがあり、その周りには様々な小道具が置かれている。ステージ上では数人の演劇サークル員たちが稽古中。

少し離れたところで話している誠二郎、

吉岡晴良（19）、春野叶美（19）。

吉岡「だからメソッド演技ってのはさ、その役に自分を憑依させる、ってことだよ。こうさ、なんか表面的な見た目とか喋り方だけ真似すんじゃないかって心から……っていうか」

誠二郎「うーん、なんか曖昧。絶妙に足りない気がして」

吉岡「んだよ、それ。いやでも難しいわ、説明って言われても」

叶美「まああれじゃない？ 例えばさ、自分が実際には体感してない役柄の感情とかその辺を再現するためにね、自分の過去の経験を掘り起こして無理矢理その感情を再現させる、みたいな」

誠二郎「……！」

吉岡「おっ、そうそう、それぞれ、まさに言いたかったのそれよ」

誠二郎「続けて」

叶美「んゝ例えばさ、仲間の死に悲しむ主人公を演じたいならさ、自分が前に何か大切なものを失ったときの感情を思い出してみるとか……」

誠二郎「……凄いな」

叶美「うん、そりや凄いよ。だからハリウッドでもずっと使われてきてるわけだし」

誠二郎「そのメソッド演技ってやつを極めればさ……変化できんのかな。他の誰かに」

吉岡「変化？」

叶美「何それ。ま、そうね、ただの上っ面だけの演技とは全然違うから。演じる人によっては本当にそのキャラの人生を生きききたんじゃないか、ってくらいの仕上がりにだってなれる」

誠二郎「……！」

叶美「ただその一方で色々と危険な面もあるんだけどね。やっぱさ、完全にその役柄の感情に寄り添おうとしたり、自分のトラウマを掘り起こすわけだから。そりゃ精神は削られるわ、人格がブレてくるわ……」

吉岡「現に役作りをしすぎた影響で病気になるっちゃったり命を落とした人っていうものいるわけだしな……。ま、俺は趣味の演劇にそこまで賭けたくはないわ」

誠二郎の表情が曇る。

誠二郎「そう……なんだ」

叶美「つてかどうしたの、急にそんなこと聞いてきて」

吉岡、誠二郎の背中を叩き

吉岡「お！　ようやく入部する気になっちゃいました？　演劇サークルを成功に導く最後のピースになっちゃいます？」

誠二郎「いや……」

誠二郎のスマホが鳴り出す。スマホを確認する誠二郎。母・晴子からの着信。

誠二郎「あ、ごめん、んじゃこの辺で。ありがと」

○誠二郎の家・外観（夜）

辺りは暗くなってきている。

晴子の声「さて、これはどういうことですかね！！」

○同・居間（夜）

机を囲み、座っている誠二郎、正宣、

晴子。萎縮した様子で背中を丸めている誠二郎。

机に置かれたスマホの画面には、路地裏に入っていく誠二郎の写真が表示されている。

晴子「お父さんが見つけたみたいよ。あるでしょ、心当たり」

正宣「最初は……俺も目を疑ったよ」

晴子「最近、帰りが遅いとは思っていたけどまさかこんな遊び回って……。この一番大

切な時期に……ほんと信じられない」

誠二郎「（俯いたまま）いや、違う……」

晴子、机を叩き

晴子「何も違くない！！　何も！　悪いのは全部あなた！　全部、全部！」

誠二郎「……」

晴子「あなたももう3年になって就活の時期！　わかってるでしょ？　あなた程度の学力じゃね、少し出遅れたら一生追いつけない！　あの子のように要領が良くないんだから……あの子のように出来が良くないんだから！」

誠二郎「違う……。俺は兄ちゃんじゃないんだし……。勝手に期待して……勝手に失望されても……困る」

晴子「じゃあなに？　あなたは誰？」

誠二郎「え……」

晴子「あなたは自分からは何も行動しない。自分じゃ何も決めれない、自分の意思も目標も全然ない。空っぽ。そうでしょ？　だ

から私はね、誠一が敷いてくれたレールの
上にあなたを歩かせようとしてあげてるね、
ねえ！」

黙って頷く正宣。

誠二郎「……」

晴子「それなのにあなたはずっと自分自身か
ら目を逸らし続けて楽な道、楽な道を歩き
続けてきた。逃げて、ずっと逃げ続けて。
自覚してるでしょ？ その結果がこれ、自
業自得」

誠二郎「いや……」

晴子「え、じゃあ何？ ちゃんとあるわけ？
やりたいことが。何？ じゃあちゃんと言
ってごらんよ！」

誠二郎「俺の……俺のやりたいことはさ」

鋭い目つきで誠二郎を見つめる晴子と
正宣。

誠二郎「……いや、ごめん」

そのままただ俯き続ける誠二郎。3人
の様子を見つめるように部屋の隅に置

かれている誠一の遺影。

○速水幻庵事務所・速水の自室（日替わり）

写真には若い頃の速水幻庵とその父、
幼い妹が写っている。

その写真を真剣な眼差しで見つめる速
水。

速水「……」

ピロン、とスマホに通知音。速水、ス
マホを確認する。

誠二郎からのメッセージだ。

『すみません。少しの間、休暇を取ら
せていただきます』

速水、どう返信するか迷っている様子。

玄関のチャイムの音が鳴り響く。

速水「……おっと」

速水、机に置いていた丸サングラスを
装着し、部屋を出ていく。

○同・応接室

小テーブルを挟んで座っている速水と
依頼人・早川愛花（22）。愛花、俯い
ている。

速水「さて……それでは例の物をよろしいで
しょうか？ 前もって用意していただいた
あれを」

愛花「はい。それじゃあ……これを」

愛花、幾つかの写真や資料を机の上に
置く。

その写真に写っているのは若き日の速
水幻庵。

速水「……！」

一瞬、サングラスの中の目を見開く速
水。

愛花「あ、これが今回、変化してもらいたい
方です。早川庵治。私の……兄にあたる人
です」

速水「（動揺を見せずに）ご提出ありがとうございます
ございます。なるほど、お兄様ですか。しか
し……兄にあたる人、とはこれまた随分と

他人行儀な言い方で」

愛花、再び俯き

愛花「兄は私がまだ小学生に上がったばかりの頃に家を飛び出してしまいました。で……それつきりです。今はどこで何をしてるのやら……連絡手段も何もないんでね。こんなネット社会で何の情報も出てこないなんて……ほんと不思議ですよね」

無理矢理笑みを浮かべる愛花。

速水「……」

愛花「でも……きつと生きてると思うんですけど。どこかで。何の根拠もないけど」

速水「生きていてほしいものです。で、貴女はその生き別れのお兄様とお話がしたいと？」

愛花「いえ、もちろん私も会ってみたいんですけど……何より、父に、どうしても父に会わせてやりたいんです」

速水「お父様？」

愛花「はい。父はその……兄の将来を巡って

揉めに揉めたらしいんです。それから絶縁状態……父もずっとそれが心残りみたいだったから。だから最後に一度だけ兄と話をさせてあげたいんです！ たとえ本物でなくとも！」

速水、眉をピクつと動かす。

速水「最後……というのは？」

愛花「あ……はい。父は数年前から体の調子が良くなって。もう……長くないですよ」

速水「……そうでしたか」

愛花「（頭を勢い良く下げ）だから、だからお願いです！　どうか依頼を受けていただけないでしょうか！　このまま、蟠りが解けないままなんて……そんなのあんまりです！　こんなんじや父も兄も……」

速水「愛花さん、どうかお顔をお上げください」

愛花「私は……私は知ってるんです！　ちゃんと覚えてるんです！　家族3人仲が良かった時代のこと！　そして……父も兄の

ことを本当に愛してるって」

速水「……」

速水、フウっと大きく息を吐き

速水「申し訳ない」

愛花「えっ」

速水「本当に申し訳ないが……この依頼、どうやら私には些か荷が重すぎるようだ。諦めていただきたい」

速水、愛花に背を向ける。

愛花、立ち上がり、速水の前に立ち塞がる。

愛花「ちよつと、ちよつと待ってください！
あなたはどんな依頼も断ったことはないっ
て……どんな変化も成功させてきたって聞
きました！」

速水「……」

愛花「どうして！ どうして私の依頼だけ駄
目なんですか！ 一生に一回のお願いなん
です！ もう時間はない！」

速水「確かに……確かに私はこの『変化師』

という仕事に誇りを持っている。信念があります。しかし、だからこそ、毎回並々ならぬ覚悟で依頼を引き受けているのです」

愛花「……」

速水「この仕事は人の思いを全身で受け止め、背負っていく仕事だ。他者の人生も信念も願いも……全てをです。だからこそ……中途半端な状態で仕事を引き受けることはできない」

愛花「どうして……」

泣き崩れる愛花。速水は背を向けたまま。

速水「本当に……申し訳ない」

○誠二郎の家・誠二郎の部屋（夜）

勉強机に向かい、座っている誠二郎。机には演技や心理学に関する書籍が幾つか置かれている。

誠二郎、ノートに何か書き込んでいる。傍には『幻庵さん 変化 メモ』と書

かれたメモ帳。

メモ帳には『変化は対象者の感情・願い・人生に寄り添わなければならない。その人は何を考え、何を思い過ごしていたのか。何故この行動に移ったのか。その人は何を願っていたのか』と書かれている。

誠二郎「……」

誠二郎の手が止まる。

誠二郎、机に置かれた誠一の写真に目をやる。

誠二郎「……何になりたかったんだろ」

そのまま天井を見上げる誠二郎。

誠二郎「……全然知らなかったんだな、あんなに好きだったはずなのに」

ノートのページを捲る。

そこには『自分自身の内面』と書かれている。

誠二郎、下に『自分が今したいこと』

と書き足す。

誠二郎「……」

○速水幻庵事務所・玄関前（日替わり）

扉には「一時、休業中」という貼り紙。事務所の玄関前に立っている誠二郎。誠二郎、扉の貼り紙をまじまじと見つめている。合鍵を使い、ゆっくり扉を開ける誠二郎。

誠二郎「失礼します」

○同・応接室

部屋の中は散らかっている。

速水の姿はない。

誠二郎「……」

小テーブルに置かれた資料に気がつく

誠二郎。先日、速水が愛花から受け取った資料。

誠二郎「！」

誠二郎、速水の若い頃の写真に気がつく。近くにあった資料には速水のデー

タが書かれている。

『早川庵治 1988年4月1日生まれ 父↓早川耕治 妹↓早川愛花 学生時代から役者の道を志し勉強 20歳の時、本場の演技を学ぶため単身渡米。以来消息不明』

誠二郎 「これって……」

誠二郎、他の資料も漁り始める。その中には愛花からのメッセージも。

『どうか私の一生に一度の願いを聞いていただけませんか。お願いします。貴方だけが頼りなんです。 愛花』

誠二郎 「……」

その場に立ち尽くし、机に置かれた写真や資料を見つめている誠二郎。

速水の声「覗き見とは……これまた随分と悪趣味な」

誠二郎 「！」

速水、誠二郎の背後にいつの間にか立っている。

速水「随分と集中されていたようで」

不敵に笑う速水。

誠二郎「……すみません、勝手に」

速水「まあ構いませんよ。貴方ですから見逃して差し上げます、今回だけは」

誠二郎「……はい。（入口の方に目をやり）と
ころで、あの貼り紙」

速水「ああ、あれ。大した理由はありませんよ。ある程度お金も貯まってきましたしねえ、ちよつとした休暇、自分へのご褒美つてやつです」

誠二郎「そう……なんですね」

速水「おや、何か言いたいことがありそうな顔をした」

誠二郎「えっ」

速水「ほら、今、しましたよね？　なんですか何か気になることでも？」

誠二郎「いや……その俺、ずっとわからなかったんです、自分っていうものが」

速水「ほう。長くなりそうだ……とりあえず

座って」

誠二郎「あ、はい」

椅子に腰掛ける誠二郎。速水もその向かいに座る。

速水「はい、では続けて」

誠二郎「小さい頃はずっと兄ちゃんの背中を追いかけてたんです。あの頃の俺からしたら一回りも離れた兄ちゃんは凄く大人で。本当にカッコ良くて……兄ちゃんならなんだってできるんじゃないか、ってそう思ってた」

速水「私も一度、誠一さんに変化させていただきましたからね。貴方のその思いはこの身をもって体感いたしました」

誠二郎「はい。でも、ある日そんな兄ちゃんが突然居なくなつて。ほんと目の前が真っ暗になるってこういうことなんだな、って……」

速水「……」

誠二郎「その後は知つてのとおりですよ。と

にかく親の期待に応えなきゃ、失望されな
いようにしなきゃって。でも兄ちゃんみた
いにはなれないし……何も上手くいかない。
今だって、あの頃の兄ちゃんの年齢に追
いついたけど全然……」

速水「完全に他の誰かと同じように生きる、
なんて不可能ですから」

誠二郎「でも、じゃあ本当の俺ってなんだろ
うって考えでしたら……そうしたらもっと
頭の中がごちゃごちゃになっちゃって。こ
れまで自分の本当の気持ちなんて考えてこ
なかったし……いや多分目を逸らしていた
んで」

速水「……」

誠二郎「でも幻庵さんと出会ってなんか少し
ずつわかってきた気がするんです。俺はと
にかく、自分じゃない何者かになりたかつ
たんじゃないか、って！ だから俺も変化
師になってみよう、って。そうすれば初め
て何者かになることができる！ それに、

初めて誰かの役に立てるんじゃないか、つて！」

誠二郎、メモ帳とノートを取り出す。

ノートを広げる誠二郎。ノートには沢

山の書き込み。

誠二郎「だから俺、今必死に演技とか心理学とか勉強してるんです！ 幻庵さんが言っていたことを思い出して色々……」

速水、ノートを床に勢いよく払い落とす。

誠二郎「えっ……」

速水、立ち上がり、冷たい表情で誠二郎を見下ろす。

速水「……去りなさい」

誠二郎「いや、えっ、そんな……」

速水「私は初めに言ったはずだ、弟子を取るつもりはない、と。変化なんてすべきじゃない。あんなのただの毒だ」

誠二郎、立ち上がり

誠二郎「幻庵さん！」

速水「変化は……いやそもそも演技というのは恐ろしいもの。己自身をも蝕んでいく。

……演技を甘く見ない方が良い」

誠二郎「そんな……甘くだなんて！ 俺は本

気なんです！ 俺は本気で……」

速水「とにかく去りなさい。貴方ももう現実に向き合う時期でしょう」

誠二郎、拳をグツと握り

誠二郎「じゃああなたは……幻庵さんはなんで変化師なんてやってるんですか！ 1人で！ ずっと！」

速水「！」

速水、誠二郎に背を向ける。

速水「私には……これしかない」

誠二郎「現実に向き合えてないのは……どつちですか。あなたも俺と一緒にですよ！ ずっと逃げてるんでしょ！ 誰かの皮を被つて！ 本当の自分からも、お父さんから
も！！」

速水「！」

速水、静かに天井を見上げる。

誠二郎「すみません、勝手に色々。でも、どうして会ってあげないんですか、お父さんに！　どうして……妹さんの依頼、受けてあげないんですか！」

速水「君には関係のないことだ」

誠二郎「だって……会えなくなってしまった人に会わせてあげる、それが変化師なんですよ！　お父さんとはまだ会えるのに！　今ならまだ……」

速水「（遮り）もういいんです！！」

誠二郎「……」

珍しく声を荒げた速水に、放心状態の

速水。

速水「……貴方にはわかりませんよ、こればかりは」

速水、誠二郎と視線を合わせずに、部屋を出ていく。

呆然としていた誠二郎、急いで速水を追いかける。

○同・速水の自室前

誠二郎、ドアを開けようとするが既に
鍵が掛かっている。

誠二郎、ドアを叩きながら

誠二郎「幻庵さん！　お願いです！　自分自
身から……お父さんから目を背けないであ
げてください！　妹さんの願い……叶えて
ってください！」

返事は聞こえてこない。

誠二郎「俺は……俺は幻庵さんに出会って……
……そのおかげで俺だって何者かになれるん
じゃないか、って思い始めたんです！」

○同・速水の自室・室内

速水、無表情で入り口に背を向け、立
っている。

速水「……」

○同・速水の自室前

誠二郎、ドアを叩き続け

誠二郎「じゃあ……約束してください！俺はちゃんと……自分の口で……親に伝えてみせます！自分の今の想い、自分がやりたいこと、全部話します！だからそれが成功したら幻庵さんもちやんとお父さんに会いに行ってください！」

○誠二郎の家・外観（夜）

○同・居間（夜）

机を囲み、座っている誠二郎、正宣、晴子。

誠二郎、深刻そうな面持ち。

晴子「ほんと珍しい。誠二郎が自分から話したいことがあるなんてねえ」

半笑いの晴子。

誠二郎「真剣に……聞いて欲しくて。真面目な話だから」

晴子「はいはい」

正宣「……言ってみろ」

晴子「なに？　ようやく行きたい会社が絞れてきた？　それともなに？　インターンでも決めて……」

誠二郎「（無視して）俺、ようやくね……見つかったんだ、やりたい仕事が」

晴子「ほら、やっぱし。ようやく、ね。で、どこなの？　どこの企業？」

誠二郎「いや、ちょっと違う」

晴子「え？」

誠二郎「ちょっと変わった仕事なんだけどさ。

『変化師』って仕事でね。（次第に声が尻すぼみになりながら）実はちよつと前からそこに通つて……で、凄く素敵な仕事でさ……」

晴子「待って、そんなの一回も聞いてないけど？」

誠二郎「うん、ごめん。でも……」

晴子「（正宣に）ねえ、聞いたことある？　その、変化師？　なんて」

正宣、自身のスマホで『変化師』と検索する。検索結果に『速水幻庵事務所』が出てくる。

正宣「（晴子に画面を見せ）これだとさ」

晴子「は……何これ？　いかにも胡散臭い！　もしかしてあなた、騙されてるんじゃないの？　洗脳よ、洗脳！　ほらあなた、自分の意思がないから……」

誠二郎、勢い良く立ち上がり

誠二郎「違う！！」

晴子「……」

誠二郎「違うって！　そうやっていつも何でも……自分のイメージだけで勝手に決めつけんたって！」

正宣「誠二郎」

誠二郎「変化師はさ、凄い仕事なんだよ。会えなくなった人に会わせてあげる、つまりその……人を幸せにしてあげる立派な職業なんだ！　自分自身を……」

正宣「（大声で）誠二郎！！」

誠二郎「！」

正宣「何もさ、俺も母さんもお前が憎くてこ
う色々と言ってるんじゃないんだ。ただお
前のことが不安でならないだけなんだよ。

……なあ、晴子？」

晴子「そう。だってあなたはいつも現実を見
れていないから」

誠二郎「そんなこと……」

晴子「（遮って）誠一はね、ちゃんと強い意志
を持ってそのうえで私たちにしっかりと説
明してくれたの、いつも。だからあの子
には私たちもほとんど干渉しなかった」

誠二郎「（俯き）……」

晴子「で、あなたはどうか？ あなたの今のス
キルで本当にその職業に就けるのか？ で、
その職業はこういう形で成り立っている
のか？ 収入は？ 生活はできるのか？ 将来
家族を養っていけるのか？ その職業に未来
は？ どう？」

誠二郎「いや……それは……」

晴子「別にあなたが自分の道を進もうとすること自体を否定したいわけじゃないの。ただあなたがちゃんと私たちに説明できなきゃ……そしてあなたがちゃんとその職業で一生やっていけるスキルがあることを見せてもらわなきゃ……私たちは安心できないの。わかってくれるでしょ？」

誠二郎「……」

晴子の目元には涙が浮かんでいる。正宣も陰しい表情。

晴子「私たちはもう……失いたくない」

誠二郎「……ごめん」

○速水幻庵事務所・速水の自室（夜）

机に向かい、座りながらコーヒーを飲んでいる速水。

机には愛花から貰った資料も置かれている。

速水「……」

×

×

×

(フラッシュバック)

鬼気迫る表情の誠二郎。

誠二郎「だって……会えなくなってしまった人に会わせてあげる、それが変化師なんですよ！」

×

×

×

速水、溜息をつく。速水、机に置かれた資料にパラパラと目を通し始める。若かりし日の速水の写真や速水のプロフィール、速水の性格、癖などについて書かれた資料。

速水「！」

その中の一枚に『父から見た早川庵治』という見出しの資料が。恐る恐る本文に目をやる速水。

そこには『夢に向かって真っ直ぐ。努力家。自慢の息子』と書かれている。

速水「……」

○同・外観（朝・日替わり）

朝日が眩しい。

○同・速水の自室（朝）

部屋の入り口付近に誠二郎。速水、誠二郎に背を向け座っている。

誠二郎「すみません。……やっぱりダメでした。っていうか気づかされましたよ、やっぱり俺まだ甘すぎたんだなって」

速水「……そうですか」

誠二郎「はい……。でも俺、諦めません！だから決めたんです……」

速水「（遮って）緑川誠二郎くん！！」

誠二郎「えっ、あ、はい」

速水、ゆっくりと立ち上がって誠二郎の方へ。

速水「だから言ったでしょう、演技とは甘くないものだ、と」

誠二郎「はい……」

速水「だから少しの期間、この速水幻庵が直々に指導して差し上げようかと思っているの

ですが……如何でしょう？」

ニヤツと笑う速水。

誠二郎「えっ」

誠二郎の表情、次第に笑みに変わり

誠二郎「……はい！！　お願いします！」

○スポーツジム・トレーニングスペース（日
替わり）

ランニングマシンで走る速水と誠二
郎。

速水「まずは側から、なんて言葉もあるでし
よ。対象者が歩んできた軌跡に思いを馳せ
ながら……まずは肉体をしっかりと作り、
対象に寄せていくんです」

誠二郎「はい！」

走り続ける2人。

○速水幻庵事務所・応接室

日替わりカレンダーが次々と捲られて
いく。

○衣服屋・店内（日替わり）

商品を眺めている速水、誠二郎。

速水「しかし変化とは単なるコスプレではありませんよ！　もしその人だったら今この状況をどんな出で立ちで過ごさだろうか？　と、そう考えるんです」

誠二郎「なるほど……！」

○眼鏡屋・店内

陳列された数々の黒い丸サングラスを眺めている速水。近くに誠二郎。

速水「悪いですねえ、私の買い物にまで付き合ってもらっちゃって」

誠二郎「あ、いや、全然。で……それって、今着けてるのと同じやつじゃ？」

速水「はい、私はこれが大のお気に入りですね。常に同じのを10本はストックしておきたいんですよ」

誠二郎「……」

○速水幻庵事務所・応接室

日めくりカレンダーが次々と捲られていく。

○同・外観（日替わり）

快晴。

○同・玄関

玄関に速水、誠二郎。誠二郎、短髪にオシャレな帽子、服装。誠一に寄せたビジュアルになっている。

誠二郎「それじゃあ行ってきます！」

速水「まあ付け焼き刃にしてはそれなりの出来にはなったでしょう。流石私の指導力だ、我ながら感心する」

誠二郎「……でもほんと、ありがとうございます
ました」

深くお辞儀する誠二郎。

速水「まあやはり血の繋がった兄弟なわけ

すし、ずっと貴方は対象者のことを見続けてきたわけだ。十分見事な変化と言えますよ」

誠二郎「これで……説得できますかね？」

速水「そればかりは私にも何とも。まあ、期待はしていますよ」

ニヤリと笑う速水。

誠二郎「で……どうなんです？ 幻庵さんこそ」

速水「はて？」

誠二郎「いやほら、依頼ですよ、妹さんの。

無理強いするわけじゃありませんが……」

速水「依頼は受けませんよ」

誠二郎「（浮かない表情で）そう……ですか」

速水「あくまで、依頼は受けない、ですよ？

なんせ変化する必要なんてないんですから」

誠二郎、パツと表情が明るくなり

誠二郎「それって……」

速水「お互いもう偽ってばかりでは居られませんか」

○誠二郎の家・玄関前

インターホンの前に立つ誠二郎。中々インターホンを押すことができない。大きく深呼吸し、自身の頬を叩く誠二郎。

一瞬にして鋭い目つきに。

インターホンを鳴らす誠二郎。

○同・居間

並んで座っている晴子と正宣。

誠二郎の足音が近づいてくる。

晴子「ねえ、大した理由も無しにどこほつき歩いて……」

誠二郎、居間に入ってくる。誠一のようないな出立ち。

晴子、言葉が止まる。正宣も驚きの表情。

誠二郎「（くしゃつとした笑みで）ごめんな、母ちゃん」

晴子「えっ……」

誠二郎、椅子に座る。

誠二郎「ほんと、母ちゃんにも父ちゃんにも
色々迷惑かけてばっかしだったからさ。そ
れに……誠二郎にも」

晴子「……」

○大病院・外観

○同・廊下

廊下を急ぎ足で歩いていく愛花とその
後に続く速水。

愛花「さあ、こっち！　こっちです！」

速水「あの……本当にすみませんね」

愛花「？」

速水「長い間、君にばかり負担を背負わせて
しまつて。そして……ずっと黙っていて」

愛花「別に気にしてませんから」

速水「あ、もっとラフに話していただいても
良いんですよ。一応兄妹、なんですし」

愛花「いや……だってほら、そっちがその、

他人行儀なので」

301号室が見えてくる。

愛花「あ、ここです！」

速水「……！」

○同じ・301号病室

部屋に急ぎ足で入ってくる愛花。速水はその後ろから恐る恐る顔を出す。

ベッドに横たわっている早川耕治（68）。点滴が打たれており、以前より随分痩せてしまっている。近くの机には棒キャンディー。

愛花、耕治の元に駆け寄り

愛花「お父さん！ 連れてきたよ……お兄ちゃん」

耕治「（速水の姿に気づき）庵治……庵治か……」

速水「……親父」

速水、丸サングラスを外し、耕治の元

へ。

速水「親父……親父……ごめん。ずっと……
ごめん」

速水、床に膝をつき、耕治の手を取る。

耕治、笑って、速水の頭をポンと叩く。

耕治「（笑いながら）なんだその身なりは。一

丁前に」

速水「これが今の……仕事着なんだ」

耕治「へっ。まあ……お帰り」

速水「……ただいま」

愛花、2人の様子を嬉しそうに見つめて
いる。

○誠二郎の家・居間

晴子、泣き崩れる。

晴子「誠一……本当にお帰りなさい」

誠二郎「母ちゃん……」

正宣、立ち上がって、晴子を揺さぶる。

正宣「違う、違うって！　違うだろ、晴子！

ほら、誠二郎だろ？　今居るのは誠一じゃ

なくて誠二郎だって！」

誠二郎「……」

正宣、誠二郎の両肩を掴み揺さぶる。

正宣「誠二郎、お前も！」

誠二郎「……」

正宣「お前のその、変化？　それは認めるよ！

俺も一瞬さ、お前がほんとに誠一みたいに

見えて……驚いたよ。でも、こんなの悪趣

味だろ！　誠一の真似をして？　晴子を泣

かせて？　お前は何がしたいんだよ！」

○大病院・301号室

速水、体を起こした耕治の側に座って

いる。少し離れたところに愛花。

速水は普段とは別人のような穏やかで

力の抜けた表情。

耕治「（速水のサングラスに気づき）あ、お前、

それ……まだ持ってやがったのかよ」

ニヤリと笑う耕治。

速水「そりや特別だよ、これだけは」

耕治「へっ。そういやお前、聞いたぞ、愛花から。変化屋……ってのやってんだってなあ」

速水「変化師、だって」

耕治「すげえじゃねえか。日本でお前、一人だけなんだろ？（お金を示すジェスチャーで）これも結構稼いでるって」

笑う耕治。

速水「ああ。……ごめんな、親父。あんなに強情になつてさ、あそこまで揉めたのに……結局俺、立派な俳優にはなれなかったよ。やつぱし逃げちまったんだ……」

愛花「……」

耕治「何言つてんだよ。人間そうやってさ、何度も道を選びながら、ぐるぐる回つてさ、それで自分の本当の行き先つてやつを決めんだろうよ。俺なんて、回り続けて今じゃこのザマ」

速水「親父……」

耕治「それで結局大好きな演技もやれて、金

稼いで、そこで色んな人を幸せにしてんだろ？ 万々歳じゃねえか、何も言うことねえ」

耕治、ゆつくりと速水の方に近づき、速水を抱きしめる。

速水「！」

耕治「よく頑張ったな、庵治」

速水、自然と涙が溢れ出す。

速水「親父……親父……ありがとう……ありがとう」

耕治「おいおい、いい歳した髭面の親父がワシワン泣いてんじゃねえよ。おめえ、もしかしてそれも演技か？」

ニヤリと笑う耕治。

速水「……さあな」

涙を溢しながら、ニヤリと笑い返す速水。

その様子を見ている愛花、涙を拭っている。

○誠二郎の家・居間

正宣、誠二郎の両肩を掴み、揺さぶっている。晴子は椅子に座り、俯いたまま。

正宣「なあ！　なんでわかってやらないんだよ！　晴子の気持ちをさ！　お前にただ真っ当に生きていってほしただけなんだって！」

誠二郎「……真っ当、ってなに？」

正宣「ああん？」

誠二郎「兄ちゃんと同じように生きれば真っ当？　2人が望んだとおりのことをしてれば真っ当？」

正宣「ああ、そうかもな。でもそれは見た目を真似ろとかそういう意味じゃない」

誠二郎「……俺は俺なりに真っ当に生きてるつもり。今の俺は、ね。この変化だってそうだよ。俺は変化っていう道を知って……いや、教えてもらって、それで何かが見えなかったんだ。兄ちゃんになったのだった

てそう、ただ真似しようってわけじゃない。
兄ちゃんの見た景色を……一回見てみたか
ったから」

正宣「なんだよ……それ」

誠二郎、誠一の遺影を優しく見つめる。

誠二郎「でも……やっぱしさ、俺は兄ちゃん
にはなれないよ。今改めて実感した。それ
に……あの人にもなれない、やっぱり変化
って甘くないからさ」

フツと笑う誠二郎。

正宣、机に置かれていた幾つかの企業
パンフレットを手に取り、誠二郎に突
き出す。

正宣「そうだろ？　そうだよ、お前は誠一み
たいにはなれない。でもさ！　でもそんな
お前でもちゃんと上手くやっていけるよう
に父さんも母さんも必死に考えてんだよ！
ほら、晴子がちゃんとマークしてあるから
さ、ここに書いてある企業を……」

誠二郎、パンフレットを払い落とす。

正宣「お前！」

誠二郎「俺は兄さんやあの人みたいにはなれない。でも気づいた、ならなくて良いんだって」

正宣「あ？」

誠二郎「父さんと母さんが俺のことを心配してくれてんのはよくわかる。わかるよ、ありがとう。でもさ……俺はもう大丈夫だから。心配しないで」

正宣「……」

誠二郎「俺はもう……逃げないからさ。将来からも……自分からも。ちゃんと向き合って、自分の道は自分でしっかりと……決めていくから」

正宣「でもお前な、本当にお前がそんなこと……」

晴子「もういいから！」

正宣「！」

晴子、顔を上げる。

晴子「もう……大丈夫。この子が自分でここ

まで言い切ったんだから……ここまでやり切ったんだから……ここまでの意志があるんだから。私たちは……後は見守ろう」

誠二郎「母さん……」

正宣「（晴子に）本当に……良いのか？ それで」

晴子「だってほら……見てみな、あの子の目。

あれは変化だとかそんなちやちなものじゃなくてさ、正真正銘……あの時の誠一と同じ目なんだもん」

誠二郎、真っ直ぐな目で2人を見つめ続けている。

正宣「そう……だな」

誠二郎、そのまま2人から視線を逸らさない。

○速水幻庵事務所・玄関前（日替わり）

扉には『営業再開　どうも皆様お待たせいたしました』という貼り紙。

○同・速水の自室

机の上に二枚の写真が飾られている。

一枚は、以前まで本棚に挟まっていた

16年前の早川家の家族写真。その隣

には病室で撮影された早川家の新たな

家族写真。

その近くで速水と誠二郎が向かい合っている。

速水も誠二郎も普段通りの出で立ち。

速水「で、どうするんです？　これから」

誠二郎「そう……ですね。結局この前の変化も中途半端な出来だったんで」

速水「ほう」

誠二郎、深々と頭を下げ

誠二郎「なのでお願いします！！　これから

も引き続き変化の指導を……」

速水「却下します！」

誠二郎「えっ！？　え、いや、どうして！？」

速水「だって貴方にはもう変化は必要ないんじゃないありません？　ほら、自分で言ってた

でしょ」

速水、小型のボイスレコーダーをチラツと見せる。

誠二郎「……全部聞いてたんですか」

不敵に笑う速水。

速水「何はともあれ貴方は最終的に自分自身の言葉で親御さんを説得してみせたんです」

誠二郎「……」

速水「貴方はこれから自分の言葉で伝え、自分自身の道を探していくことができるはず。だから貴方にはもう変化なんてものは必要ありませんよ」

誠二郎「……それは幻庵さんだって同じでしょ？」

速水「いや……私も今回身を持って感じさせられましたよ。私もまだまだ未熟である、と」

誠二郎「いや、そんなこと……」

速水「演技をするうえで何より大切な自分自身を見失いかけていたんですからね。元の

卵が悪いんじゃ、オムライスも卵焼きも、
親子丼だって良い料理になるはずがないじ
やないですか」

誠二郎「（同情する様子で）速水さん」

速水「おっと、そんな湿っぽい空気はやめて
ください！ 私はこの挫折を味わったこと
により『天才変化師』から『超天才変化師』
へと進化したんですから！」

堂々と胸を張る速水。

誠二郎「まったく、幻庵さんらしいや。……じ
ゃあこれからも続けるんですね、変化師」
速水「結局私はね、この仕事が、変化が、そ
して演技が……大好きで大好きで堪らない
んですよ」

微笑む速水。誠二郎も自然と笑みを浮
かべる。

誠二郎「俺も必ず見つけて見せますよ。そん
な俺だけの道を」

速水「いいんですよ、いいんです。人間とい
うのはね、何度も道を選びながら、ぐるぐ

ると回り続けて、自分の本当の行き先とやらを決めていくんですから。ま、これは私の言葉ではないんですがねえ」

速水、家族写真の方を見つめる。

誠二郎「もしまた、ほんの少しだけヒントが欲しくなったら……会いに来てもいいですか？」

速水「ええ、勿論。但しその際はしっかりと依頼料をいただき、貴方に素敵な体験をプレゼントして差し上げますよ。変化師・速水幻庵の名にかけて、ね」

ニヤリと笑う速水。誠二郎、ついふつ、と笑い出す。速水も同じように笑い出す。

2人の笑い声が響き渡っている。